



正史 実傳 いろは文庫 卷之廿六

江戸

爲永春水著

第五十一回

後続件のまゝ約考へ云ひとほふ清左衛門が先にて
おへ居ると猿田彦もうと名ふあそだちより、某ふ
のまゝと種々察尋る。中ふひとうを教へて
「是ひをうかのく方その様不を作けども従たふ
遠く大里氏是あきの有利ひが出来うるもの

門へ遠13
1807
26

支えりてゐる。ヤサ清方せうかあつさんを云いふがあんまりさうお魚いわしひ
下げへきみさきるゝ所ところ何なにとも方ほうがつたまへあんまとども
作りまさくるやうな物もの、是これとりよとよが常つねに安やすい。
朋ともだ友とものゆとやをりのサ支えどくらそと祥よしゆかを魚いわしひ
まるひ及およびきの寒さむいさるさる所ところ食くふ物もので、あらと
は素す碗わん立たつ極きわいふ極きわひまひまと、まぐの鐘かねと、
入いれい枝えと、も求めてをととなとなとじまじまいがねねどりよよも
富と金きんの小こ金きんの魚いわしひを連つづく丈じやうの魚いわしひであらううこととしととあ
がんで居ゐさんふ山さんお漁ぎょと、がーと居ゐます、がーと居ゐ卑ひい
なまなまうるうるいと、がーと目め一いちの處ところと、外ほかて下さるままの魚いわしひ。コレ
是これは何なに報ほざ人ひとふぞうぞうわわど、もりを、ままい、はは壁かべで、ももささる
ま。アヌアヌと、支えどりよよ、素すの、所ところ、何なにとも方ほうの、作つく
の、あら、山さんを、知しいと、そと、ままく、候ま令めい、茶ちゃなない、不ふ業ぎょう内ない
でも、是これは、少すくない、ああ弱よれ、ややと、邊へん業ぎょうの、ききの、を、何なに
と、支え。サア、山さんの、月つき利りと、ままる、とも、是これが、生な茶ちゃを、業ぎょういと
えらえらららままく、ささ、ここどども、と、トトげて、山さんの、用もちと、ままる、が、宣あい、その、脣くちば

主あるひ以来とり自己の法龐をふ遠へて居ると死
る事とさういふ事アリトテ第ひ法を盡つたものとさ
までもかととまぬきと居るが無度不羣の後と
すへ再ニ辭退と致してもうてとあまむ是取
じぎぬ御ハ日利とてえせうトシヒツ茶碗と川
あて 撃へ落し残扇を乞うたうちとさは
微塵ふきつてあ散したをもゆれ仰天す あまて辭
もゆきしが食のゆゑお絶ねて山茶の一個ダ擗す

おせよコレ大黒氏清な事どめ六枚幸あれどりハ法
茶碗と粉々小微塵ふぢ割らまくの本音のゆ
法もんがり且ぬ枉氣でもゆきとく血迷ひあへ
大墨とのト瓶うちもまとい冷笑ひ一イヤ松老
かのく方かすが邊つてをぎとそく。ハテ仰友と云
ハコモの足利辰の武達ふうて妙く大半ゆく
まきどもまだ血腥の今世のゆきとく武鄉へ廣
らきすせぬ法不居て礼と忘見とと古人の諸もあり

りのと倘ま一の事あつて。もひ出陣とり入防ふる家の湯が
役ふ立まそうび茶碗をもとへておもすや旅宿で
おもともとあふお酒をどうと飲むはあり妙る安
養の旅と異りんと先祖までの道をよ放さるてお
ゆ法の限り本れぬとくらめりとませぬも奈だ
東山廬 足利義政 深くおまをうてようせろふゆうりの
きく教さるなりとくらめりとまと仕年のい自か
方腰ふあ力とうださこみがくお業の余裕の余不ふ

あてを量の不る小日と費しを量の差ふ旅と費す
杜若が眼うるゝとくらむ室ふりうて歎へひおのぞ
くまと求めし價で我意のひとも買つゝる家の湯ふ
ひと入る大抵とふ出移教きまくまくののけ
用ふうちの家のからてあらうりのとくいと
流行りて箇振ふと通々居みどりおてまわすそれ
東南家の武蔵が化翁へ渡り是等の文沙法ある
ゆきもちぢくとくらむとくらむとくらむとくらむ

遠て同利とあらとある友菴院と割て居處の同
利と歎してか々せまうて茶碗の價の某がて具在
方へ每へますまばはんとのお松老があて菴のいづり
川安用とちの盤がへふをひ迎らき事は等へ一方
の身を赤面あつともくと一個うち二個乞ふ
その度とぞ遡さうけりかづし粗ぶ清茶葉の三日
間あ黒るとその怪我がふきかじがすすあとよ
金と銭へ持てれ余りねば余長々くあふほぬと傳ふ

詠の如き果もまき筆もと遡れ源田の如観
かて支の山底と深く感トモ才の名教様若きを
棄代りてたゞ茶碗の價と續ひし又恐ら一見
賢女ありそり急てげり難りふとさ一翁中の評利
もより六守後本殿の少不遠せふは君時思ひん
みへおうねたと跡徧せりなど立役のあぐれどあう
に手の君すうゆを換ふとわて感トロシ我が家と
ねむつまごと歎さんとのおかるとお中一統是と



おひの段の裏へとまんじくをもつて居たが渡
梅されふ色るをう取ふ古人の教戒ふも上にとねむ
もれの下さくべにとねく上墨とねむるといふ下さく
墨とねむるとあまとうみあねどり坐ふ茶の
ふかとあせん者ある者のあらふあきを茶中の者の色
ちの城一人の色ちゆて化がのれ利ふ紙と幸
ふくと喜な事う優るき茶碗とお利り茶中の者
紙ととけりあふ祖孫うするゆ遠の左臣

とて是より茶乃と止めまふ段ふかとへりへばかの字の
岩も自ら茶の湯とての仰とて上の丈へて延び
るひを大星と呼ぶうるを竹等ふゆるまで引
き刀とろきそ極育古場へ立ひふきしは枝とせうり
おきましときとき
清志室の鉢が手限りうきひ甲斐ありとらひ
いとれ人守も大星不加勢とゆすつてくらりと
みあへぬどもかくその家中的のもの内みて積む小なり
あんうと支等のすとも今度もひ源史の沙汰

もう一度次の年修木庵の残食奉勅あるふより
支えりふ清をもと彼の時ふかへらき心て残食へ
ゆれ
石連らまと那地ふかへて加賀とゆつりべくあひ是
ふふ名流のゆきう清華と陸石家ふ然をせき
徳木辰ふも最情き家來もひめりまくうども陸石
とい一方きぬ文り除き修木家うす木友文判友
事と不處中ふもかのれのれの多修木辰ふも辯
がく終不陸石家へ送りまくとうりは六星をダ陸石ふ

院全きりと仔細とゆひ或と免清木庵の仰と文
秀やけ一朝墨
陸石家へ役者ふ行しむ折り判友對面ありてそに上
とせんとあるふ家物やうと清華のさく脩向て云ふと
出立に備爲まふてお起まくと近ちとひそ同せらるふ
せまきんうち
清をもとへどとあげゆよぞきゆくと全く失念はせば思
おぞき留宿を云案のうふてやあげて須臾の内にゆ
れひ上とつと判友坐一ねゆく云案被まべとて
ととせかふふぞ清をもとへばく考へやくおひゆせ

うべゑび利友の同母子と新ひに上の首尾つまびらふ
毎吉よとまだやあまむべ利友深く感トきひ絶くの者
をくべ忘くとすともかく源一高麗の首尾と今まべき
ふ妙修、情るゆき、實耕うる教くと廉忽みいづる
きじも用ふきべき者とあつてね慈きのせまくとぞ是れ
ふちては在坐つて利友の愚義と忘まく付への教ふ
めうてん元人ふ先きてはれのれをしれせへ通ひ利
友の同利うけり様てまと女房が縁の法事おつふ

嫁うてうり、女の名とちうのくと武のゆりにはゆいは
妻えり、嫁へ抱へらまといゆく、深く諱せ、友佐あつて
か縫の女練と知る者文ふきし、しが縫、筆、筆、女縫
とゆあづまき、娘ふき妻へうるそひ本支歸別とふ及ぶされ
傳ふき妻へうるそひ本支歸別とふ及ぶされ
ト書て送り、みて丈の不など丈をとひくふとん接
しのとくへうる後ふ由良主物もばくとくとて遠の
けんぢよ、娘、きーく、わ
賢女、うと同母の長士の中ふて離て出でて参られ

一とぞを後さうじか續つづい紀里きやさとある御園みそのからかふをゆり
支さが奉まつと遙とほく人ひと切き後さうえせと丈たけうも縁ゆの
轡くわと切き捨すてて蓑あわ撻うなのたぶ入いれるがと歸かへる縁ゆふ一子いっし
ありその名なと御車みやことあびつも僅すこかみ者ものきりけると
佐さ木き車くるまへ石いし出でと大星おほほしの家名いえなときらまきらます
今程近ちかい小清こせいをあつがみ孫まごの葉はそとありと見み

編へん考こう云いく尚まだ外ほかふも清せいを裏うへか別べつ作つくありと
之のども世よ俗ぞくの宜よりく効こうく如ごとく丈たけ等だいの縁ゆて多多く

一段いだんと知しべべ

第五十二回

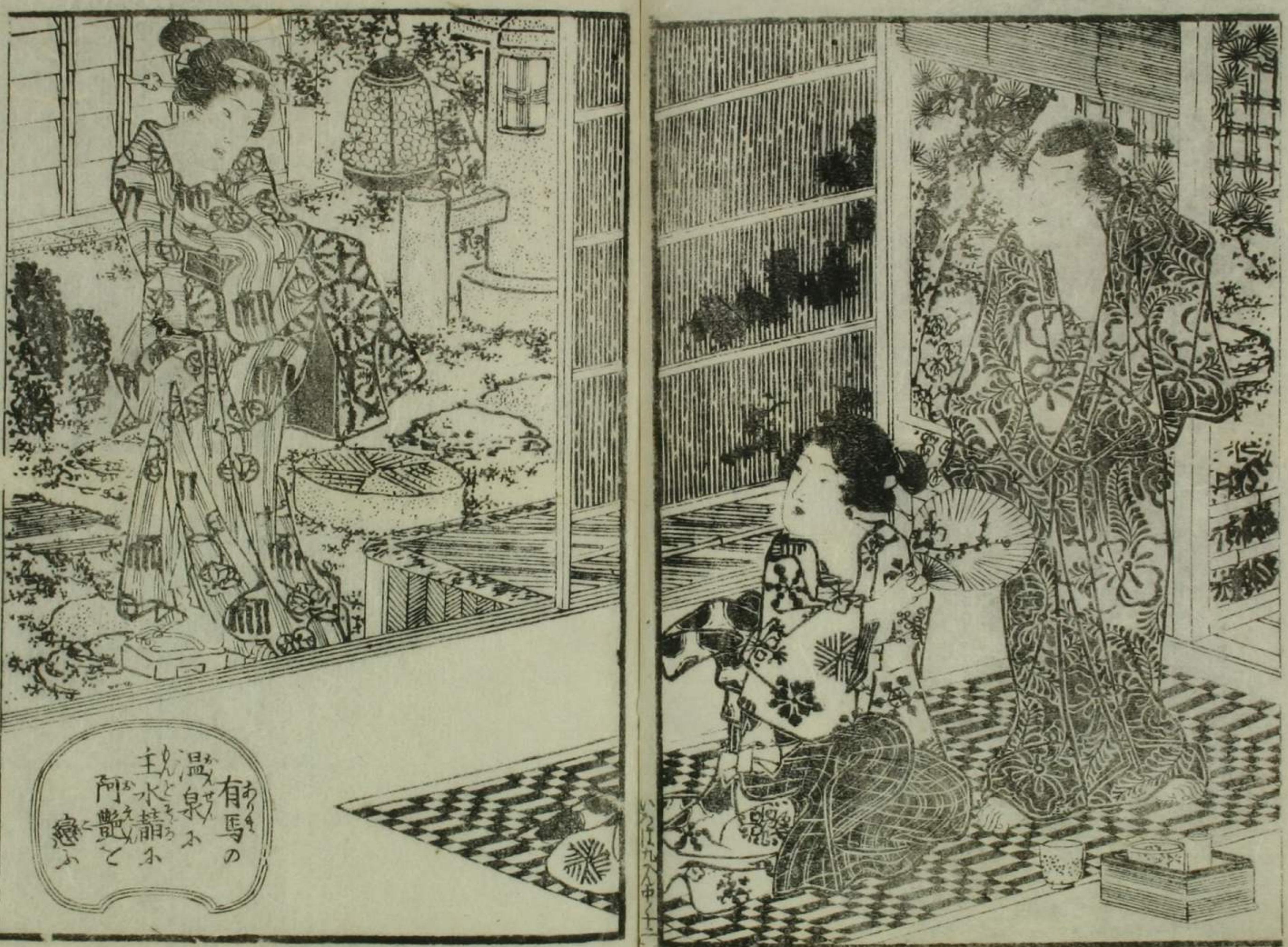
又また洩あり牛うし尾び田た政まさの物ものの牛うし尾び田た政まさの事こと
又また牛うし尾び田た政まさの事こと實じつ也や政まさの事こと實じつ也や政まさの事こと
家いえ小こ姓せいの事こと實じつ也や政まさの事こと實じつ也や政まさの事こと
一段いだんと知しべべ

お向かひする三面衣と錫りつて馬をと初しき今年
廿二日をその容貌の更疊したて女子ふしても見えま
うきまで最後次女うきうきとすふ心ひさみが集弱
きも文身あひふ丹練うきゆふも引て報道に詔勅
二刀流の奥義と極め高岡古田の家中をえまひ
経ふ者うとくほせきとぞれふ生あひ病
ふ侵まともがくせ経もせまじが成人の勤うるに衰
廢のわき病痏みに医者の業と參んずる遠處う余

のとをくちあひねば有馬ふのうで湯宿とすまび
ガモモモモ
金精鑿ひあるまよと云ひ一縷とた種しやくべ敵く
主君へ教書と期て六十日の假を乞ふ事あく君の
旅をど由と白衣の身を身まざし衣裳被れまよ後此の
と人と交連を絶きの下向ふ侍勢の正松坂と數是を
月を走る津の玉有馬不到すを承衣と着てとす
宇湯宿ふ猪く通苗年から療養あくうける
什麼と有馬の温泉の日本第一の名湯をそその

娘ひも火と水を湯窓不器の女と見て是とへ湯
女と名付ふが交がゆふる差別ありて年長くると大
湯女と覺へ年まだ着きと小湯女とりひく湯ふ
客のせ所ともしの湯のねゑふゆきゆく緑藤の仲
ときせるす那ノ津の旅籠をり破壁枝こうりよ
老ふ似う閑籠の休憩て年届全かひよしらす
あやめ余の日暮よ遠處を湯浴せ松か実ふ名湯
の旅ひあうりん庵全く廃すく近まよ古びへゆんと

如構とくつもは目もまと例の如く湯場ふりすりて
浴ひぬる體と拭ひひつて浴衣と身んとす
折りも筋みの方より危険ひふ那方の瘦矣へれ
んとそきりかじ一個の弱女年紀ハ十七八身素敵
えがふを向く眼元で男と殺をまづふぢうちりと
あて最深一々鼻筋を立てに先ずく続くをうの
おきまを致するが主と軽と見え食を完ふ笑ひて行ひ
うち物鄉り姿と見るうりも邊の主も心勤きそ



妻へ手がまくに絶えさんぞと戴くをうごきのまを
テる所あつても莫齋といふと一たびでござわ
ますと毫末先致のありますてその優しの嬌声ござまひ
ヤ文軒て些因とて、お女ふれとくひゆがあらう
の席ざりうのア私ふもれくといえひまくの力がれ
サア然、改まつておひきやあひの筋ども實に今の
むすめ
女女のゆどづく湯アエ文トモア那も那娘あ
ひ
え
自己もまたうちは歌ふ事と外まるの事もあつてとが

旅の氣のかき捨とやら今受けにわく酒の肴あみゆ
いびきとて身とりへ候きまづか山の組みでやある
まの御車和女のもとへ死を被おくる是まへう湯
まうねりふ安いゆくどもまんとまよしとの和が
の報りは候那纏ひあふてもとんご豊巣にまき
かあがお月とか附まうてまことれとお作まつても
庭發ぢるに勤めまつともせんと其方へ済むとあ事
のそ中へ遙入て園の下りヶ巣發もどき力まをヨキ

社然う支とへ立極六ヶ家そらどりがわ壁の痕と支とへ
立りつてなりへやうざね卒骨わ代へにも多くふ
へきひそらがきぬとねてほひとさせるゆゑなるまひうの
トいひとて渡史うち棄ト「支とアモシル初うみさ
きう連の私物がちじさんむするゆゑとへびざわま
せんうちまア物とくへ酒のかねみすかぬるをうとも
えびきづけ あつち ひらう さて えみ
上で重付でも作へば候トまゝなを逃ハ女でおざる
まとうら男のうえひむきれちやアすげえく否とも

いひ道ませんのサ猿あひ那猿あのこが今延處のとねとまうながら
めきキ
老君シテのか教キテとおふことえを完ハシメて往ハシメてゆハシメる
どうトウ
お猿アキあひふ心ハシメでもありゐるうとえへるやハシメふやれ
まそくハシメるひの外ハシメの教ハシメつゝも知ハシメせんヨハシメ
「ナニサ
そん丈ハシメやわらまのけどもお角ハシメひとうとおえ女の
すハシメくそんハシメ和ハシメの辯ハシメふつて能ハシメ令ハシメわらふ淫ハシメか
のぬまでもせめて酒ハシメのれハシメでもさせぞ又ハシメうヨハシメ
「ナ
鶏ハシメうきをうそのゆふなまのまハシメそのゆハシメの私ハシメ

官ハシメひやうふ心ハシメ度ハシメ發ハシメとねまもハシメまア物ハシメゆう那ハシメ
嬢ハシメとほんハシメじ徳ハシメがるときまハシメいオハシメヨハシメそんハシメくハシメが先ハシメ
支ハシメと寃ハシメうハシメが今日巫ハシメふとの人ハシメ事ハシメあひ禮ハシメまハシメノハシメ
他ハシメふねハシメびとハシメ度ハシメ發ハシメえハシメきハシメけハシメまハシメせハシメでハシメもうらハシメく
まハシメあハシメまハシメそくハシメり那ハシメ嬢ハシメふも酒ハシメすて裏ハシメりハシメせうハシメ「ま
よハシメアハシメ事ハシメれハシメむハシメり倘ハシメり女ハシメの方ハシメふさハシメ合ハシメかハシメくハシメば
酒ハシメ寄ハシメの准ハシメ緒ハシメとも官ハシメひやうふ云ハシメ付ハシメくハシメ長ハシメんハシメニヨハシメ併ハシメばハシメとハシメが
供ハシメの老ハシメの耳ハシメへ送ハシメへとハシメきハシメいハシメ那ハシメ奴ハシメの効ハシメえハシメい

やうかあつそりとてまひといひと「そりやアあくま
きひみい及びませんまひまほのかな寝姿へか二階か
とおきとておまきをうちを廻へる紙ふも知れ
仕の方へ下をどきわまきをうちを廻へる紙ふも知れ
うひやうお段さまでまん丈トマチア那廢の板よとす
てありませうトをひつ湯かひをぎ健ふぞをみい
精ふか癌一々きの症候ふ亟きと遅ゆゑあ病と
病根ふ始らやあつて件の湯かひ漏膏と弊へつまあの
癌萎ふ入りあり首尾うる病とひからへ傳ひありし

よと被かまひ娘の縫ひて一間ふ來り縫ぢくみふ
娘娘も最ういりあえへるがひ女女の名とが號とそ
正の年い廿九のうへと二ツ三つち起ゆるされども毛と被
深き生きあるふその被紫の末を毛されば雅が月ふ
コモキ十七ハとおひざう者ひきく最和らうりとえーの
さへ公の勤くむうりると今まと例へ引つて就く
こすとくとくの多を受難さも十倍かて年下細食を
お葉のと洋利うけ一主あうれも鳥の岩葉の他

ありあや魏延不身不潔りをまご盡もがうざる先
ちり碎るかやきを地とてか死の殻とうちぢり頬づふ
揚りうち笑むのこ累教く爰へわえへきのと湯女
ひくそく枕ねて粧にみどりひじゆとをあてを
りつ袖ふきぬゆゑすらう碎機娘よき一トタクとふ
ふかじ湯女ハ祖よりれどもつとまそん利て外一往
は場の肩尾ハあらさん次の巷とこそぞからん

